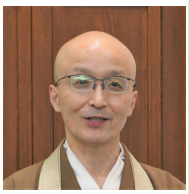
設立 平成24年 5月15日
開塾 平成24年 9月 8日
発行 令和 5年 3月11日
（118号）

中之島ニュース

［事務局］
〒567-0861
茨木市東奈良2-7-10
人間学塾・中之島
古田修平

禅の教えに学ぶ～臨済禅師に学ぶ

横田南嶺 先生



■「お前こそが仏だ」

私の初めての絵本『パンダはどこにいる？』は、臨済禅師の教えを子どもにも分かりやすく書かせていただいたものです。臨済宗は、今から一二〇〇年ほどまえの中国の唐の時代の臨済禅師が開祖、南宋時代に渡った栄西禅師が日本に広めました。修行僧は仏を誰しも仏を求めます。その仏とはどこにあるのか。臨済宗では、自分の外に仏を求めるのではなく、臨済禅師は「祖仏（達磨様やお釈迦様）は、今わしの面前で説法を聴いているお前こそが仏だ」と説かれました。仏とは悟った人、人格の完成された人でありましょう。しかし、あなたが仏だと言われても、なかなかそうは思えない。高楠順次郎先生は「仏とは無限の可能性である」と言われていますが、本来私たちは無限の可能性を持っていると言われます。しかしながら、孔子様の言われるように「汝自らかぎれり」、自分で自分を見限っているのでしょう。

■臨済宗の三つの学び

臨済禅師の言行を記し『臨済録』としたのが弟子の慧然です。それには「無事の人」について書かれていますが、まさに「無事」について書いたものが、先のパンダの絵本です。日常では病気や事故などのないことを「無事」と言いますが、臨済禅師の説かれた「無事」とは、外に求めようとする心の収まった状態のことを言いました。臨済禅師の「無事」に到達するまでは厳しい自己格闘が『臨済録』には記されてあります。

また臨済の求めるところは「人（学問・地位・名誉等外界のもの）に騙されるな」ということでした。今日においては、一切の情報を受け入れないということは無理でしょうが、それらに振り回されることなく、自分が主体性を持って判断し、生きていくということになろうかと思います。

臨済宗から学んでいただきたいことは次の三つです。

①無位の真人（しんにん）～自己の素晴らしさに目覚める。

②随処に主と作（な）る～どんなところでも主体性を持つ。

③活潑潑地（かっぱつぱっち）～いきいきと生きる

あの西田幾多郎先生が「あらゆる書物が無くなっても、『臨済録』と『歎異抄』さえあれば良い」とまで言われています。

■肉体の上に働く素晴らしいもの

語録の中では、臨済禅師が悟りを得るまでの大変な苦労が語られています。臨済禅師にも暗闇の時期があり、焦りで心は落ち着かぬままに道を追い求めていました。黄檗禅師の門下でひたむきに修行し、臨済禅師は黄檗（おうばく）禅師に「仏法の究極とはなにか」を尋ねます。尋ねるたびに棒で打たれ、自信喪失し禅師のもとを去りますが、その後仏法の究極を外に求めていた自分に気づきます。黄檗禅師に質問したとき、何度聴いても棒で打たれたのは、罰を与えられたわけなどではなく「仏法の究極はあなた自身ですよ」と示されていたのです。

そうして悟りを得た臨済禅師は、多くの人に説法を行いました。臨済禅師の世に知られる言葉に「赤肉（しゃくにく）団上に一無位の真人有り、常に汝等諸人の面門より出入す。未だ証拠せざる者は看よ看よ。」↓この肉体には無位（＝位などでは表せないほど素晴らしい）の真人（＝本当のあなた）がおり、その顔（目や耳や口のなどの感覚器官）から出たり入ったりしている。さあ見よ、さあ見よ。）ここに素晴らしいあなた＝仏がいるのだ。それを見届けておらぬ者はさあ見よ、とのお説法です。また、鈴木大拙先生はこう取り上げられました。「宗教の要求するのは、概念ではない、書物に書いてあることではない。今生きている真の人である。お雛様を飾ったのでは活きていない、いかに美しくても手の届かぬ客観的幻影の世界に座り込んでいては何にもならぬ。活潑潑地の真人でなければならぬ」。それまでは、仏の心とか人間の本性であるとか、正しくものを観る、正しい智慧等、インドの仏教学から抽象的な表現で説かれていたものを、臨済禅師は、生きている人の上に見よ、この肉体の上に働く素晴らしいものを自覚せよと具体的にされたところに特徴があります。

『臨済録』から学ぶこととは、誰もが皆、素晴らしい働きをしているということ。一人一人がその素晴らしさに目覚め、自覚ができたならなんら情報に惑わされることはないのです。主体性をもって生きていきましょう。暗い顔をしていては後に続く世代が希望を抱けない。こうして学んでいる私たちだけでも、明るい顔で生きていきたいと願っております。

（抄録　中川千都子）

グループ討議　二月

◆横田南嶺　先生　２月18日（土）

Aグループ
・主体性を持つ。
・だまされない人になる。
・活潑潑地（かっぱぱっち）

Bグループ
・自己の素晴らしさに目覚める。
・活潑潑地。
・私達は仏そのもの。

Cグループ
・自分らしさに出会う。（無位の真中）
・仕事にどう取り組むか。
（随所に主となる）
・活潑潑地。生き生きと生きる。

Dグループ
・無事（外に求める心を納めた状態）
・多子無子（余計なものがない）
・喜んで生きること。喜んで暮らす。

Eグループ（リモート）
・「パンダはどこにいる？」の絵本がすばらしい。
・大人がイキイキと生きる姿を若い人や子ども達に見せることが大切。
・情報は大事だが、情報にふりまわされないようにすること。

新規塾生感想

原周作

中之島人間学塾に入塾して良かった！入塾し半年、折り返し地点。関西の美味しいものをたくさん食べました。たくさんの人と出会いがありました。日本人として生まれて大切なものを感じました。

東京大阪間の新幹線は、講義の振り返り、普段読めない本を読んだりと多くの学びや気づきがあります。自分にとっては貴重な時間で、あっという間です。そのため東京から大阪は遠く感じません！せっかく東京から関西に来たのだから、関西の一宮神社を参拝したり、パナソニックミュージアムや大阪市中央卸売市場を観光してきました。5月には桂離宮と修学院離宮にも行く予定です。このことも私なりの中之島人間塾の楽しみの一つです。

今までの講師陣の人柄、講義内容は本当に素晴らしいです。毎回、涙や笑いあり、人生観を変えるような言葉に出会っています。入塾した時の自分を振り返ると、今までになかった価値観や考え方ができるようになりました。また、人生の中で自身が苦手としていることに向き合うことを少しづつ実践しています。これも中川塾長はじめ運営に携わる一人一人の人間力のおかげだと感じています。また中之島人間学塾に集まる受講生もいい人ばかりで優しいです。やはり中之島人間学塾は「人」が素晴らしい。

残り6回となりますが、講義や皆様と会うことが楽しみです。講義で学んだことを実践し自分の人生を豊かにすることができれば幸いです。皆勤賞目指して頑張ります！

寺田先生に導かれて ④ 近藤宏枝

「いつも褒めてもらうために」

三年ぶりにお越し頂けた近藤世話人

三年ぶりに中之島で受講する「人間学塾」は、皆さんの真摯に学ばれるお姿に大きな力を頂きました。そして思いがけず代表の中川千都子さんから「一言講話」の依頼を受けて、塾生としては「ハイ！喜んで」とお引き受けするしかありません。もちろん私のお話は、寺田一清先生から頂いた御教えです。

さてある方から「何のために」と言われたら、どう答えるかと質問されました。私は躊躇せず「過去も今も、そして未来も、寺田先生に褒めてもらうために」と答えました。正師と呼べる寺田先生に出会えた私は、必ず正しい道に進めるのだと信じているからです。

平成八年・月刊『致知』の対談で、坂村真民先生が寺田先生に「ぼくは寺田さんにお会いしたら言わにゃいかんと思っておったことは「人生二度なし」というものが森信三先生の真髄だ、と。森先生の光だ、森先生の永遠の魂、不滅の魂だ、と。森先生は庶民の中に生き、亡くなって行かれたんですから、あなたが責任を持って、森先生の魂が庶民の中の光となって広まっていくようにしないといけませんよ。」と真言されましたが、特に「先生の魂が庶民の中の光となって広まっていくように」寺田先生がこのことに人生を懸けて貫かれたからこそ、森先生没後三十年経っても今なお、教育界に身を置いていない私達が身近に学ぶことが出来ているのだと思います。どんなに感謝の言葉を重ねても、このご恩には追いつかないのだと実感するばかりです。

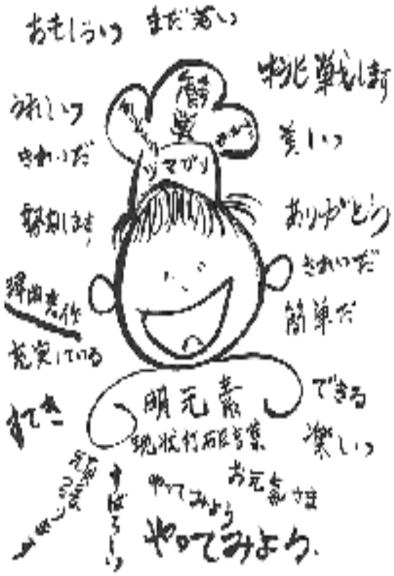
《人間学塾・中之島》次月日程

◆日程　４月８日（土）

◆場所　大阪城ホール
コンベンションホール
◎場所にご注意！

◆講師　津曲孝

◆テーマ「生きざまの中から生き方を学びました」



入塾メッセージ

真田 清美

ご尊敬する中川先生をはじめ既に入塾されてる友人がいて共に学びたいと素直に思いました。下座を忘れない自分でいるためにも人間学塾に身をおきたいと思いました。

よろしくお願いいたします。

土屋 章

落とされし　腕は高野の露深き
その奥つきの　土にうずめむ
（大石順教尼）

入塾は、平成二十九年の大石順教尼没後五十年記念行事への参加から始まり、祖父の五十回忌を控え感慨深いものでした。

人間學塾・中之島の雰囲氣を一言で表すと「清けし空氣感」で、一度でファンになりました。

中村　隆行

今期は、初心に戻って「学び」を深めたいと思います。

お忘れじゃないでしょうか…

皆様の原稿がないと、このニュースは成立しません。

そこで再度のお願いです。

入塾メッセージ・読書感想文

未提出の方早急にお願いします。

編集後記

編集をさせて頂いて、早、半年以上。

平素から文章を作成してますが、新聞作成は初めて。記事などをまとめていますが、やはり誤字脱字が多く、特に枠組み設定がうまくできず、ご迷惑をかけてばかりで申し訳ございません。

こんな記事を書いているなら、寺田先生のお言葉でも…と思われるかもしれませんが…。今月号の編集後記を。

横田南嶺先生のご講話。心にしみます。

近藤宏枝世話人は三年ぶりに現地参加されました。いつもコラムを書いて頂いてありがとうございます。

今期から入塾され、毎月、東京からお越しの原周作様。今回、ご無理をお願いし、原稿を書いて頂きました。

今後、突然、原稿の依頼があった場合、何卒、よろしくお願いいたします。

編集長　西村俊幸

投稿大募集

メッセージ・読書感想文もこちらにお願いします！

人間学塾・中之島

編集部　メールアドレス

2012nakanoshima@gmail.com

TEL　090-6322-2590

〒596-0828

岸和田市門前町2-7-28

編集長　西村俊幸